

2 カリキュラムにおける高・大の接続

(1) 学生が後期中等教育から高等教育へ円滑に移行できるような教育指導上の配慮の適切性

現状の説明

入学者は、年々学力低下の傾向にある。この事実を認識しながらも、カリキュラムの具体的内容についての妥当性の点検や教育法に関する意見交換など組織的対策は行われていない。結果的に、学生レベルに応じで授業レベルの低下を招いてしまっている。一方で、授業レベルの低さに不満を漏らす学生もあり、広くばらつきのある学力を有した学生に対する有効な教育システムを見いだせないまま現在にいたっている。

長所と問題点

高・大の接続問題を教員個別の対応としてきたため、授業レベルが統一されておらず、学生に対しても学習レベルをどこに据えるか混乱を与えている。学生の平均学力の低下に合わせて、授業レベルを低下させてしまっている状況に抗するためには、現行のシラバスをさらに進化させてカリキュラムとして各科目で学ぶ項目を具体的に明示し、学ぶにあたっての出発学力と到達目標を明確する必要がある。また、補修授業を設けることも必要である。これらの問題について全学的な合意には至っていない。

【環境情報学科の状況等】

現状の説明

情報系の科目に関しては、教科「情報」が平成15年度から高校で必修となり、平成18年度には、高校で「情報」を履修した生徒が入学してくることになる。現在、高校までの情報関連科目の履修状況は、高校や個人によって大きな違いがあり、コンピュータ利用のスキルにも格差がみられる。1年時のコンピュータ入門教育である「コンピュタリテラシー」においては、ガイダンスを徹底するとともに、1クラスに教員を複数配置し、ティーチング・アシスタントとともに、学生へのサービスを充実させている。

点検・評価

長所と問題点

情報系の科目を、より体系立てて教育すべきであるという意見が学科内にあり、逐次、関連教育で議論の上、教育内容を精査検討している。

将来の改善・改革に向けた方策

平成17年度からの新カリキュラムでは、学部共通の情報基礎科目として、20単位の科目を配し、それに続く学科の情報系科目を重点的に配置することによって、体系立った科目構成とすることができるものと期待される。

【情報文化学科の状況等】

現状の説明

現在、情報教育の基礎的なリテラシー教育として、入学初年度にコンピュータリテラシーとプログラミング基礎を必修科目として配し、高校で修得した情報教育から大学での情報教育の接続をはかり、以降の大学での情報教育へスムーズに対応できるように基礎的能力を養成している。毎年、高校における情報基礎教育のレベルは向上しているが、出身高校の実情や個別の選択コースにより具体的な基礎力のばらつきは大きい。そのばらつきに対応するために、これらの演習科目においてはレベル判定試験とアンケート調査をベースに能力別クラス分けを行い、高校における修得レベルに応じたきめの細かい指導を行い、2年次以降の情報教育に対応できるように、高・大のスムーズな接続を図っている。

その他、1、2年生の基礎ゼミにおいて、資料文献の調べ方、レポートの書き方など、高校教育のベースから大学教育への移行のための教育を行っている。

点検・評価 長所と問題点

情報基礎教育における能力別のクラス編成によるきめの細かい指導は、高校教育における情報教育のばらつきを埋めて大学教育のための共通のレベルに合わせる上で大変有効である。ただし、さらに情報文化学科におけるマルチメディア系の専門教育を専攻するためには、数学的基礎学力が不十分な学生が多く、さらに補講などの手段を考えなければならないといった議論がある。

将来の改善・改革に向けた方策

この点に関しても、平成17年度に向けた全学的な情報基礎教育の再編成の中で、具体的な情報基礎力養成の中で解決策が検討されている。

3 カリキュラムと国家試験

(1) 国家試験につながるのあるカリキュラムを持つ学部・学科における、受験率・合格者数・合格率

現状の説明

正課外授業として通称「スコーラ」があり、コンピュータ、会計、英会話のクラスを設置している。

点検・評価

これらのスコーラ分野は、資格試験（情報処理、簿記、英語）合格を目指すことを標語としているが、正課授業でないために参加者も少なく、また資格試験合格の実績といえるような成果も見いだせていない。実際、スコーラに所属している学生の資格試験への受験状況やその合格率等の情報公開は不十分である。

資格試験合格に対する学生の要望は少なくなく、正課授業で指導して欲しいという声も聞こえており、スコーラ制度の廃止を含めた抜本的見直しが必要である。